

# 「造形的な見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する 指導の改善に向けた研究

～心豊かな生活を創造する力の育成に向けて～

美術科研究会議

研究員 長澤 秀行（川崎市立南加瀬中学校）

柳田 みちる（川崎市立玉川中学校）

川田 順子（川崎市立大師中学校）

指導主事 岩崎 知美

## I 主題設定の理由

新学習指導要領が平成 29 年に告示され、中学校では令和3年度から全面実施となる。本市美術科では、現在は移行措置期間中として、現行の教科書を使用しながらも、先行して新学習指導要領の理念の実現を目指して研究を行っている。

そのような中、本研究会では新学習指導要領で示された内容をよりよく学校現場の中で実践していく際に大切にしていきたい視点として次の2点をあげ、研究に取り組んだ。

1つ目の視点は、「造形的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成するという視点である。中学校美術科の「造形的な見方・考え方」とは、美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方のことであり、「感性や想像力を働かせること」「造形的な視点で捉えること」「自分にとっての意味や価値を生み出すこと」と考えられる。その中の造形的な視点とは、学習指導要領の指導の内容として示されている〔共通事項〕である。中学校美術科における〔共通事項〕は、「ア 形や色彩、材料の、光などの性質やそれらが感情にもたらす効果などを理解すること」「イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること」と示され、新学習指導要領では「知識及び技能」の「知識」に位置付けられた。今回の研究では、造形的な視点である知識について、形や色彩などの性質や、それらが感情にもたらす効果等を、実感を伴いながら理解できるようにしていくことを大切にしていきたいと考えた。

2つ目の視点は、新学習指導要領の美術科の改訂の具体的な方向性にある「生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実を図る」という視点である。

研究員の所属校で、生活と学習の意識調査を実施した。生徒の約8割近くが「美術の授業が好き」と答えたにも関わらず、「美術で学習した内容が、将来役に立つ」と答えた生徒は、5割を切る結果であった。このことは、美術の授業で学んだことが、生活や社会の中で役立つといった実感が得られていないことが伺える。その改善のため、美術で学習したことを、学校の授業の中だけで終始するのではなく、生涯にわたって活用し、心豊かな生活を創造していく力を育成していくことを大切にしたいと考えた。

これらの2点を意識することによって、本市で学んだ生徒が、生涯にわたって美術に親しみ、美術で身に付けた資質・能力を活用して将来の自分の生活をより豊かにしていこうとする態度を養うことのできる、指導の工夫を図っていきたくと考え、研究主題を『「造形的な見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する指導の改善に向けた研究』とした。

## II 研究の内容

### 1 研究の目的

本テーマを研究していくにあたり、育成を目指す資質・能力と「造形的な見方・考え方」との関係を整理し、

本研究会議で図に表した(図1)。新学習指導要領の美術科の目標の柱書きに示されている「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力」は三つの資質・能力で整理されている。その三つ資質・能力と「造形的な見方・考え方」の関係は、学びを通じて生徒が「造形的な見方・考え方」を働かせることで「資質・能力」がさらに育まれたり、新たな資質・能力が育まれたりし、それによって「造形的な見方・考え方」がさらに豊かになるという関係であり、「造形的な見方・考え方」と資質・能力は相互に支えあう関係にあると考えられる。

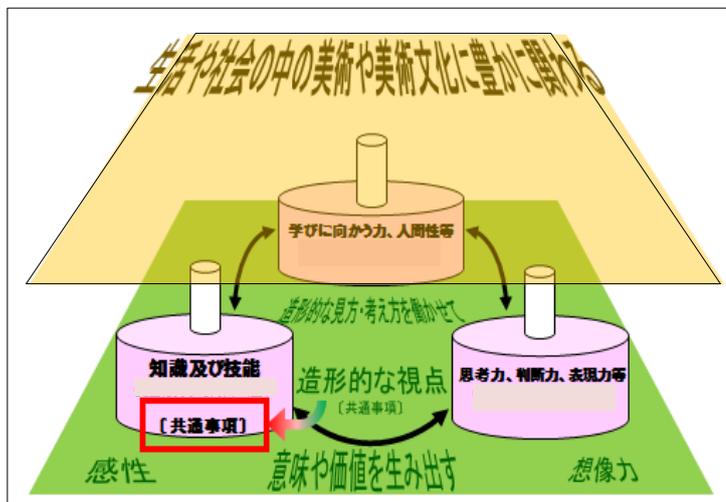
本研究では、「造形的な見方・考え方」を働かせる中で、造形的な視点をより豊かにし、中学校美術科における資質・能力を育成するための指導の改善を図ることとする。

## 2 研究の方法

研究員の各学校で2つの検証授業を行った。検証授業Ⅰでは、体験的な活動を多く取り入れて実感を伴った「知識」として身に付くように指導の改善を図った。

検証授業Ⅱでは、前の題材で学習した造形的な視点を次の鑑賞の題材においても活用し、実感的な理解として身に付けられるように指導の改善を図った。共通の視点として、身に付けた造形的な視点を活用し、感性や想像力を働かせて自分なりの意味や価値を生み出すなどの「造形的な見方・考え方」を豊かに働かせる指導の改善を行うこと

で、資質・能力の育成に有効に関与するかどうか検証した。また、これらの指導の改善を通して、生活や社会と豊かに関わる態度を育成することを目指した。



能力の関係の模式図

## 3 研究の実践

### (1) 検証授業Ⅰ (A中学校 第1学年)

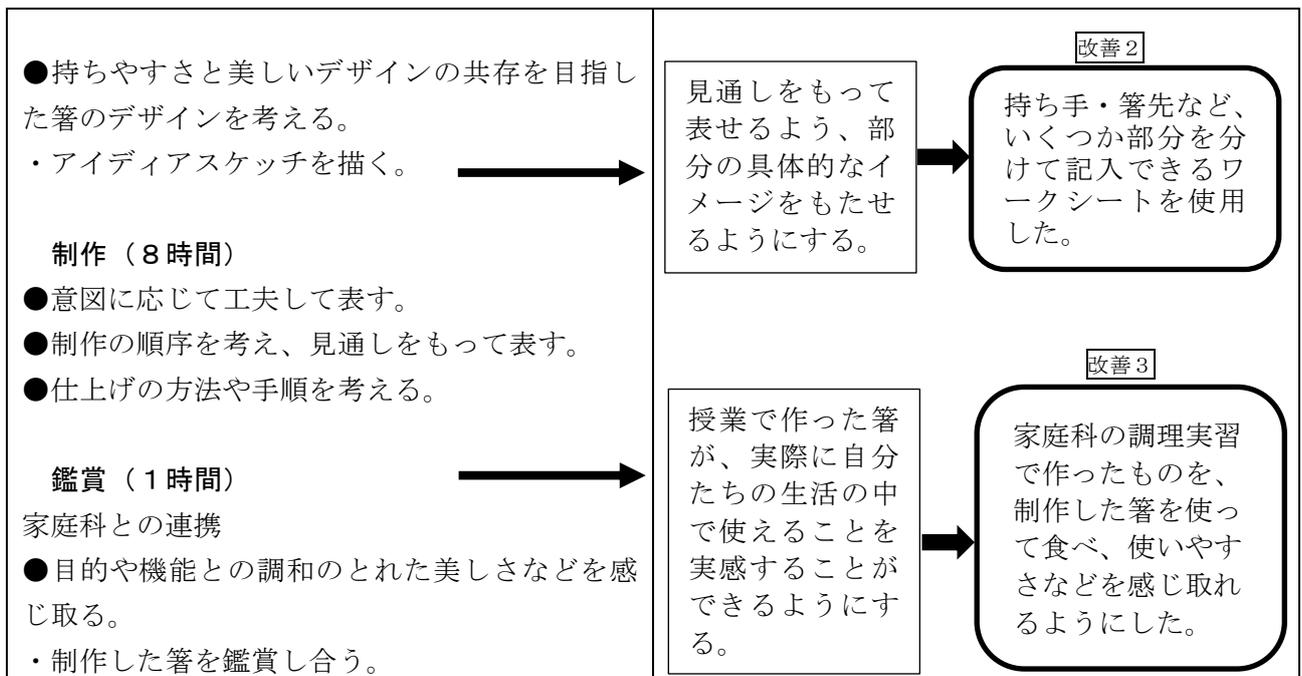
#### ①題材名『手仕事から生まれる美～ぬくもりのあるマイ箸を作ろう～』 A表現

#### ②題材の概要

本題材は、材料の性質や質感を捉え、道具を効果的に使うために必要な知識を理解し、使う目的や条件などを基に主題を生み出し、材料の特徴などから制作の順序などを考えながら見通しをもって箸に表す題材。自分の手になじむ形や長さ、食べ物をつかみやすくするための工夫などを、実感を伴って考えたための手立てを講じる。

#### ③題材の展開と「造形的な見方・考え方」を働かせるための指導の改善

題材の展開	「造形的な見方・考え方」を働かせるための指導の改善
<p>知識、発想や構想 (3時間)</p> <p>●使う目的や条件などを基に主題を生み出す。 ・箸の歴史を知る。手に合った長さについて、一般的な長さの目安を考慮しつつ、自分の手に合った箸について構想を練る。</p>	<p>改善1</p> <p>自分の使いやすい長さを実感を伴って考え、決定することができるようにする。</p> <p>→</p> <p>箸の長さを決める際に、竹ひご (35 cm) を自由にカットし、試しながら長さを考えられるようにした。</p>



#### ④考察

以上の改善を行ったことで生徒が箸を制作する意義を感じとったり、使いやすさなどを意識したりしながら制作をする姿が見られた。また指導者も箸を制作することを目的とすることから、制作を通してどのような資質・能力を育成するのかを常に意識し、より学習の質が高まるよう指導の改善を行った。導入では、箸の歴史を知ることや、日本の箸が世界中でも注目されていることを知ることなどから、日本文化への理解にもつながっていった。また鑑賞活動では、家庭科の調理実習で実際に自分が作った箸を使って食べ、使いやすさや舌触りなどについて感じ、作品に愛着をもって使用することができるよう設定した。このことで、実生活の中で、美術の働き等の理解を深めて、生活や社会の中の美術と豊かに関わる資質・能力の育成につなげることができた。

この題材では、木という素材そのものもつぬくもりを感じながら刃物を使って形を作り、紙やすりを使って表面を滑らかにしていく。紙やすりを使う段階では、手触りが変わるとに生徒はとても嬉しそうな表情を見せた。1cm角の長さ25cmの木材からぬくもりのあるマイ箸を制作する学習を通して得た知識を活用し、「造形的な見方・考え方」を働かせて発想や構想に関する資質・能力や技能に関する資質・能力を高めることができた。

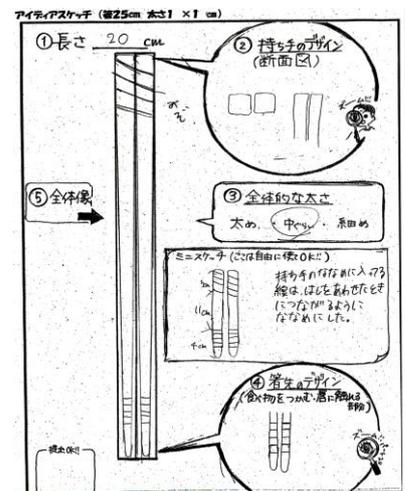


図2 改善2 部分を分けて描けるようにしたワークシート



図3 改善3 家庭科の実習での使用

## (2) 検証授業Ⅱ (B中学校 第2学年)

### ①題材名『見つける美のカタチ』 B鑑賞

#### ②題材の概要

本題材は、造形的な視点を豊かにするために必要な知識を理解し、生活の中の美術の働きについて考えるなどの見方や感じ方を深める活動を通して、鑑賞に関する資質・能力を育成する題材。前題材

で形や色彩の組み合わせによる構成美の要素を学習した上で、身近な環境から美しさや面白さを探し出してデジタルカメラを用いて撮影し、撮影したものを基にグループや全体での対話活動を行いながら鑑賞を行う。鑑賞活動において、知識が既習事項として活用され、実感を伴った理解につながっているかを検証する。

③題材の展開と「造形的な見方・考え方」を働かせるための指導の改善

**前時の題材「生み出せ文様」**

「生み出せ文様」では身近なものを単純化し、構成美の要素（シンメトリーやリピテーション等）を使用し文様を生み出す。また、文様を版にして布（ランチョンマット）に創造的に配置することで、新たな文様を表現する題材。これまでは授業終了後、制作した作品の鑑賞を行い、題材の振り返りを行っていた。鑑賞活動の改善として、学習した知識を活用し、より造形的な視点が知識として身に付くようにする。

アサガオを元に単純化

改善1

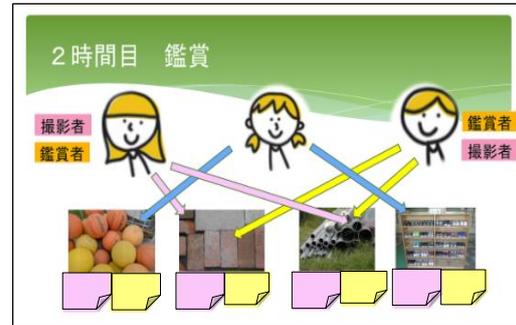
文様の授業で学習した造形的な視点を活用する鑑賞の題材を次の題材として設定した。

題材の展開「見つける美のカタチ」	造形的な見方・考え方を働かせるための指導の改善
<p><b>撮影（1時間）</b> <span style="float: right; border: 1px solid black; padding: 2px;">前時の知識を活用し撮影</span></p> <p>●身近な環境にある美を探すことに興味をもつ。 ・構成美の要素などのこれまでの学習をふまえて対象を探し、デジタルカメラを用いて校内を撮影する。</p> <p><b>第1鑑賞</b></p> <p>・自分の撮影した場面について桃色の付箋に文章にまとめる。</p> <p><b>鑑賞（2時間）</b> <span style="float: right; border: 1px solid black; padding: 2px;">知識を活用した鑑賞活動</span></p> <p>●他者の撮影した作品について、構成美の要素を基に創造的な工夫を考える。</p> <p><b>第2鑑賞</b></p> <p>・他者の撮影した作品を鑑賞し、「撮影者がどんな美を見つけて撮影したのか」「この写真の美しいところはどこか」を考え黄色の付箋に記入する。</p>	<p style="text-align: right; border: 1px solid black; padding: 2px;">改善2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 20px;"> <p>構図の効果や造形的な視点を意識し撮影をすることができるようにする。</p> </div> <p style="text-align: right; border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;">何枚撮影してもよいが、印刷できるのは1人2枚までと制限をかけよりよい作品を選択するようにした。</p> <p style="text-align: right; border: 1px solid black; padding: 2px;">改善3</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-bottom: 20px;"> <p>多様な見方や感じ方を鑑賞者と撮影者が共有できるようにする。</p> </div> <p style="text-align: right; border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;">撮影者と鑑賞者の付箋の色を変え、写真の下にそれぞれ貼ることで、視覚的に一目でわかるようにした。</p>

・4人班で、それぞれ感じたことを伝え合い鑑賞を行う。

### 第3鑑賞

・クラス全体で鑑賞を行い、学習したことをワークシートにまとめる。



## ④考察

今回の検証授業では、前題材で学んだことを生かした鑑賞題材を設定することで、既習事項である知識を活用した活動が見られた。それぞれの生徒が、美術科の知識である〔共通事項〕の視点を根拠に撮影や鑑賞を行うことで、実感を伴いながら知識を理解することができた。また、鑑賞の活動では通常は、鑑賞者からのからの意見を述べるだけで終わっていたものを、撮影者、鑑賞者、そして全体での共有といった3回の鑑賞の機会を設定し、それぞれの捉えた造形的な視点について一目で比較することができるようにしたことで、多様な見方や感じ方を深めていた。

実際の身近な生活環境の中で、美術の働きを探し出して撮影することを通して、生活や社会の中の美術と豊かに関わる資質・能力の育成につなげることができた。

<p>・体育館前工事のパイプ。丸い筒状の形が大小並んでいて奥行きがあり美しいと思った。リピテーションの繰り返しになっている。</p> <p><b>撮影者</b></p>	<p>・いろいろな大きさの丸が並べられている。長さや形もいろいろと違いリズムを感じる。</p> <p><b>鑑賞者</b></p>
<p>・体育館の横から外にカメラを向けた。 ・レンガの形がリピテーションになっている。</p> <p><b>撮影者</b></p>	<p>・同じ形のものが並んでいるが、微妙に色が違ったり、少しずれていたりと面白い。</p> <p><b>鑑賞者</b></p>

図4 生徒の作品と附箋の記述

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 研究の成果

二つの検証授業は、これまで取り組んできた授業を新学習指導要領の視点から意識的に指導を改善した授業である。作品を制作することや作品を鑑賞する活動を通して、生徒に育成を目指す資質・能力を明確にし、生徒が「造形的な見方・考え方」を働かせる環境を整えることや手立てを講じることを目指し指導の改善を行ってきた。

検証授業Ⅰでは、形や色彩などの造形的な視点を、実感を伴いながら理解することで、自分のこだわりをもち、使い心地を試しながら制作する姿が見られた。検証授業Ⅱでは、身に付けた知識を根拠

に多様な視点で、身の回りの美しさや面白さを見付け撮影したり、他者の見方や感じ方を共有したりする中で自分の考えを深めていく姿が見られた。また共通して、造形的な視点を授業の中だけではなく、生活や社会の中で生かしていくことを授業者が意識し指導したことで、生徒も授業後に意識できるようになったことが成果と言える。

今回の研究では、これまで取り組んできた授業を教師が視点をもって見直すことで、生徒の学びに変容が見られることが分かった。このことは「造形的な見方・考え方」は生徒が働かせるものであると同時に、教師の指導の振り返りの視点にもなるものであると考える。

## 2 今後の課題

指導の改善については、今回の研究のように以前に取り組んだ題材を改善する以外にも、一題材の中での改善、一時間内の改善なども含まれると考える。新学習指導要領の学習評価の改善の基本的な方向性では、学習評価は「児童生徒の学習の改善につながるものにしていくこと」「教師の指導の改善につながるものにしていくこと」と示されている。学習評価を指導に生かす観点からも、今後どのように教師が指導の改善を意識し、組織的計画的に取り組んでいくことができるかをさらに継続して研究していきたい。そして、各学校の学校教育目標や教科目標、学校の実態に応じて、育成を目指す資質・能力を明確に授業者がもち、「学ぶ意義」を生徒と共有できるような指導の改善を今後も図っていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に心からお礼を申し上げます。

### 【参考文献】

岡田京子「図画工作における「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業」  
初等教育資料 9月号

2019年

### 【指導助言者】

川崎市立中学校教育研究会美術科部会長（川崎市立京町中学校校長）

登尾 日出男